

子宮頸がんワクチン

— 予防でききる癌 —

外国語学部
英語英文学科3年

長瀬 絢香

夏休みの産婦人科。二十歳を迎えていた筆者は、家に届いていたお知らせの通り、子宮癌の検診に来ていた。そこで見た待合室の光景は、筆者に違和感を与えるものだった。というのも、辺りを見渡せば、親を同伴して訪れている中学生らしき女の子の数が、あまりにも多かつたからである。この違和感の原因こそ、この記事で示したい、子宮頸がんワクチンだったのである。親を連れて産婦人科に来ていた中学生たちは、みんなこのワクチンを受けに来ていたのだ。

子宮頸がんは、女性特有の癌であるが、現在、ワクチンによってある程度の予防ができることをご存知だろうか。近年では20代〜30代に増加しており、乳がんの次に発症の多い癌である。

この癌の原因は、HPV（ヒトパピローマウイルス）というウイルスである。このウイルスは、特別なものではなく、女性の約80%が一生に一度は感染すると言われるほどありふれたものである。HPVは100種類以上もあり、このうち15種類が発ガン性HPVと言われている。HPV16型とHPV18型は、子宮頸がんを発症している20〜30代の女性の約70〜80%に見つかっている。HPVには、ハイリスク型とローリスク型があり、子宮頸がんを引き起こすのはハイリスク型のみである。これに感染したとしても、90%以上は体内で自然消滅するため、子宮頸がんを発展するのはごくわずかである。

子宮頸がん予防ワクチンはHPV16型とHPV18型に有効であるワクチンであり、海外ではす

に100カ国以上で使用されている。日本では、2009年10月に承認され、同年12月22日より一般の医療機関で接種できるようになった。これはあくまで予防接種なので、感染したウイルスを倒す作用はなく、接種後の感染を防ぐものである。ウイルスの感染経路は性交渉が多いため、接種の対象は10歳から。45歳までの接種を推奨している。最も効果が高いと言われる年齢は、11歳〜14歳。

接種するのは、一般的な予防接種と変わらず、腕の近くの筋肉（筋肉注射）である。1〜2回の接種では十分な抗体が形成されないため、半年の間に3回の接種が必要である。なお、接種期間中に妊娠した場合は、その後の接種は見合わせるかととされている。まず、初回の接種を行う。そして、その翌月に2回目の接種を行う。最後となる3回

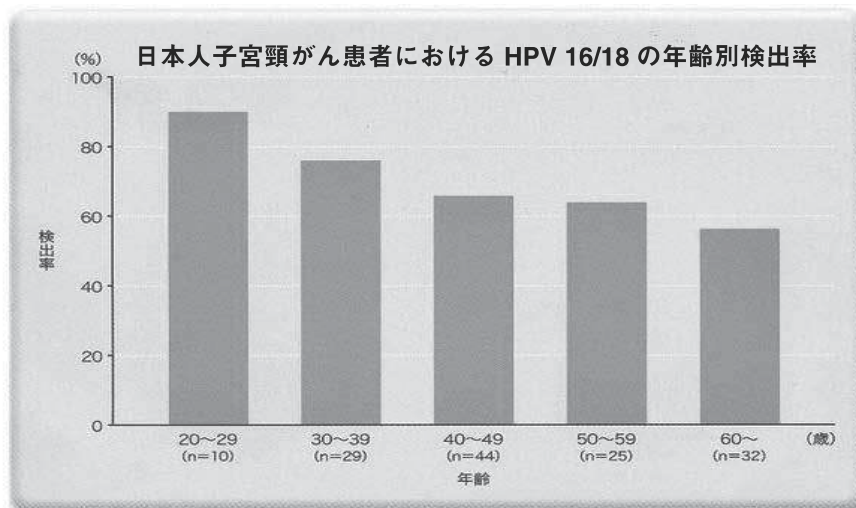
目の接種は、初回から6ヶ月後である。現時点では、接種してから最長6・4年間は前がん病変を100%予防できることが確認されている。

予防接種をしたからといって、絶対に癌にならないわけではない。定期的に検診を受け、より癌になるリスクを下げるのが重要である。

費用は、3回の合計で約4万5000円。今までは、この費用の高さが問題であったが、2010年11月から費用の公費による助成制度が始まったことから、希望者が急増し、ワクチンが足りないのが問題となっている。助成金の対象年齢は、自治体ごとに異なるが、大体10歳〜15歳までだ。冒頭で述べた違和感のある光景は、この公費の助成が始まったことによる希望者の増大をまさに示していると言えるだろう。

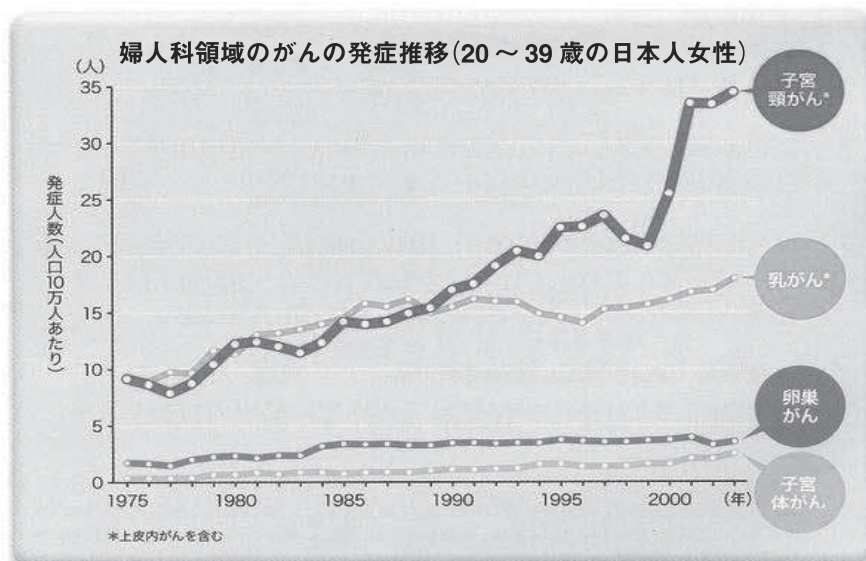
実は、この子宮頸がんワクチン、筆者はすでに接種済みである。公費の助成は筆者の年齢では適用されない。大学2年の夏休みに初回を接種し、翌年の2月に全3回の接種を終えた。よって、筆者の体験を基に、ワクチン接種の詳細を記そうと思う。

まず、初回に接種する際には、医師による問診



対象：1999～2007年に子宮頸がん検診を受けた日本人女性2,282例
 方法：子宮頸がん検診または子宮頸部疾患などの治療のために筑波大学附属病院または茨城西南医療センター病院を受診した日本人女性に対し、HPV DNA検査を実施した。

を受ける。この問診は、接種者自身の個人的なことについて聞かれるので、問診の際は、親は診察室に入ることができない。筆者が見た女の子たちの母親が入室できるのは、接種者への問診が終わった後、食べ物や薬によるアレルギーについて最終確認する時である。それから、これから接種するワクチンはどういうものであるか、どの型の



国立がんセンターがん対策情報センター、人口動態総計（厚生労働省大臣官房統計情報部）

癌を予防することができるのか、現れる可能性のある副作用など、ワクチンについての簡単な説明を受け、接種へ。接種自体は今までに受けたことのある予防接種と変わらないもので、少しチクツとして、薬が入っていく感覚があるだけである。その後、ワクチンの接種を受けたことを証明する「接種カード」を貰う。これは、接種が完了

するごとにワクチンの番号や接種の日付が書かれたシールを貼ってもらおうというものである。3枚シールが貼ってあれば、全ての接種が完了したと確認できるわけである。あとは、各自で読むように、子宮頸がんやワクチンについてのパンフレットも貰った。接種してから約30分ほどは、アナフィラキシーショックなどの副作用が見られないか確認のため、院内で安静にしていることが求められる。2〜3回目の接種は普段の予防接種と変わらないもので、注射を打ってもらい終了であった。恐らく、初回の接種でアナフィラキシーショックが起きなければ、その後の接種で起きる可能性がほとんど考えられないであろう。接種後は、普通の予防接種に比べて患部の違和感が若干強いものの、特に体調に影響は出なかった。

お金はかかるが、たった3回の予防接種を受けるだけで、日本人の三大疾病の一つである癌が予防できるのなら、受けておいた方が良いのは当然である。将来の自分のために、女性は積極的に接種して、体を大切にしていきたい。また、このワクチンの存在を広め、母親や友達など、お互いに、女性特有の病気への意識を高めておくのも重要だ。現代の医療は、癌が予防できるまでに進歩しているのだから。

参考

- グラクソ・スミスクライン「しきゅうのお知らせ」
<http://allwomen.jp/index2.html>
- ビキニクリニック
<http://www.bikiniclinc.net/kininaru/2010/05/shikyukeigan01-02.html>
- アナフィラキシー対策フォーラム
<http://www.anaphylaxis.jp/forum/anaphylaxis.html>
- Yahoo! 辞書
<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF-8&dnam e=0na&dtype=0&stype=1&p=%E3%82%A2%E3%83%8A%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%A9%E3%82%A D%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%83%E3%82%AF&index=00393250>

※ 1 前がん病変

HPVウイルスの感染によって、通常とは異なる細胞が作り出される状態のこと。これが進行すると癌になる。

※ 2 アナフィラキシーショック

ハチ毒や食物、薬物等が原因で起こる、急性アレルギー反応の一つであるアナフィラキシーの激しい場合のこと。じんましん、呼吸困難、下痢、低血圧などが起こり、生命の危険をともなう。